

現 地 通 信

マレーシア調査の現地から

棚 瀬 襄 爾

(1) 近代都市クアラ・ Lumpur

私と吉田光邦氏（人文科学研究所）の二人は後続部隊に1ヶ月先立って、6月1日羽田を立って一路 Bangkok に向った。機上から手に取る如く見える長蛇の如き Mekong の流れを見た時、「我今東南アジアに在り」の感がひしひしと湧く。Bangkok のドンムアン空港にタイ調査班の飯島君、矢野君が迎えに出てくれた。4日間程京大リエイゾン・オフィスの世話になり、最後の日、オフィスに赴任された相良教授御夫妻に連絡してから、再び機上の人となり、一応の目的地 Kuala Lumpur に着いたのは6月5日であった。K.L. では Majestic Hotel を常宿とすることにきめた。格式の高い割に安いというのが主な理由である。

K.L. はクラン川とゴムバツク川の合流点にある美しい町である。英国式のグリーンも美しいし、アラビア式のステーション、モスク、官庁建築物もエキゾチックな印象を与える。それにマラヤの独立してからの政府機関その他の建築は急ピッチで、国会議事堂、マラヤ大学、博物館など殊に見事であり、建築に工夫が凝らされていて、恐らく建築の専門家が見られたら興味が深いことと思われる。

ホテルには冷房があり、ロブスターその他の料理も却々うまくて快適である。6月ではバンコックよりも一層涼しい、塵埃もない。靴は幾日磨かなくてもピカピカ光っている。まづ一国の首都として恥しくない見事さである。これが100年前には一小村にすぎず、葉亜来をはじめとする中国華僑が、コレラやマラリアと戦いながら周囲の錫鉱を開いた中心とは思われない程の発展ぶりである。しかしK.L. ですら時々熱帯が姿を見せる。カメルーン高地に虎の一家族が出没し、鉄

砲で打ちそこなうと大変だから吹失を使えという主張があったり、K.L. 市中でコブラが何匹捕ったとか新聞が報じている。フォルマリンを打込んで捕えるのだという。

私と吉田君の K.L. での仕事はまづ日本大使館の助力を求めること、薬品、研究資材の蓄積所を作ること、三井物産はじめ若干の日本商社に便宜を与えて貰うこと、マラヤ政府機関に了解と助力を求めること、マラヤの大学の先生に意見を聞くことなどである。幸いに何れも好意的でマライ大学の先生達はマラヤには社会科学的な調査が不足しているからと大いに鞭撻してくれたし、農林省と文部省の高級官吏は貴重なサジェストをしてくれた。

私達が大学で会った主な人は Mr. Foo Yeow Yok (Registrar), Mr. R.S. Nathan (Assistant Registrar), Prof. S. T. Alisjahbana, Prof. Wang Gung Wu, Prof. D.S. Maclusky 及び Mokhzani bin Abdul Rahim, Syed Husin b. Ali, Syed Hussein b. Alatas 氏など三人の若い人類学の講師である。前回マラヤ大学訪問時に面識のある人々もあるが休暇帰国中であったり、外国へ赴任したりしていて、この人事の交流もかなりはげしいと見受けられた。

しかし私達が試みようとしているのは主としてマラヤの田舎の調査であるから、K.L. にいる人では直接の役には立たない。むしろ K.L. にいても現地に顔のきく人が有難い。その為に農林省の Mohd b. Jamir (Director of Agriculture) Lew Sip Hon (Deputy Permanent Secretary of Agriculture) Chang Min Kee (Director of Teacher Training Dept.) などの助力が有難かった。

物資蓄積には新しく開かれた Japan Club の一部を使わせて貰うことになり、厄介な荷物を一時的におくところもできた。

この外多数のマラヤの人々にも会ったし、殊に萩原氏、姉齒氏、尾島氏、下河辺氏、中村氏、武富氏、三宅氏など non-profit agencies の人々で K.L. にいて研究調査に従事している人は強い関心も示してくれたし、好意も見せてくれた。

(2) マラヤの東海岸とコレラ

吉田光邦氏の予備調査期間は1ヶ月である。以上の中には吉田氏帰国後に連絡をつけた人々もあるが、吉田氏との同行中に是非行かねばならぬのは調査地の決定である。

マラヤは稀に見る民族問題のはげしい国である。マラヤには少数の未開民族や、ヨーロッパ人もいるけれども、主要民族はマライ人と中国人とインド人である。マライ人は50%を越えないし、中国人は35%程にも達している。然も夫々が生活様式を異にし、文化的背景も異にしている。文化などと言うと抽象的に聞え易いが、夫々職業も住居も、異にしているのである。水と油とまでは云えないにしても夫々の社会的距離はかなり遠い。マライ人は高床家屋に住み、主として農業をいとなみ、中国人は主として都市住民で商業をいとなむ者が多く土間住民であり、インドは長屋にすみ鉄道、道路関係者やゴム園労働者が多い。

職業が異なれば土地利用の面でも異なる筈で、土地利用図がかなりな程度民族分布にも関連してくる。私は数年前の旅でジョホール方面が何れも大規模なゴム園の緑でつつまれていることを知っているのもジョホール州を敬遠することにし、まづマラッカとスグリ・スンビランを歩き廻ることにした。何れにも水田耕作のマライ系住民はいる。殊に Tampin や Kuala Pilah 方面は面白いと思われた。然しこのマライ人は住居の屋根の形式の異なることでも知られるようにスマトラから来住した Menangkabau 人が多く母系相続で慣習法 (adat) を異にしており、マライ人の中でも特異な存在である。この地方の研究はそれはそれとして面白いが、これもこの度は敬遠せざるを得ない。

汽車に投じた私達はまづコタバルに行き東海岸を車で南下して見ることにした。コタバルを中心とするクランタン・デルタにはマライ人が多いし水田もよく発達している。コタバル自身も他の都市とは異ってマラ

イ人が多く、マライ島のつよい町である。マラヤの伝統工芸であるクランタン・パチック、クランタン・ペラ(銀細工)などもここに一番よく残っている。ここには相当ひかれた。しかしマラヤの政情が私達を遂じゅんさせた。というのはクランタンだけは PMIP (Pan Islamic Malayan Party) がつよく、現聯邦政府の Alliance と政党が異っており、現政府の好意が受けにくかった為である。トルンガヌからパハンの東海岸は海岸も美しく、白砂に青い海と緑の椰子が映えている。マライ人の漁村もいたところにある。しかし如何せん。コレラが多い。私達の車はトルンガヌやパハンの至るところで止められて注射証明書の提示を求められた。マラヤにはここ暫くコレラが出ていなかったが昨年あたりから出はじめ、今年は殊にトルンガヌ州とパハン州に多い。死者百数十名、患者は数百名である。二名のコレラ患者で大騒ぎをした日本に比べると状況が有難すぎる。しかもこれは病院でつかんだ数字であって、病院長談などによると病院にこないでコレラで死んだというものもあるらしい。如何に海岸の見かけが美しく南洋らしくても、まづ今年は東岸村落の調査をあきらめねばならない。

(3) クダー (Kedah) 州のアロル・ジャングス Alor Janggus を選んだ訳

東海岸をあきらめるとするとまさか中央部のジャングルに入る訳にも行かぬから西海部を選ばざるを得ない。しかし西岸部もペラ州は錫鉱の中心地であるし、プロヴィンス・ウェルズリーは英国の影響がつよく、又農業改造が行われ、稲の二毛作地帯で一寸ひらけすぎている感じである。とするとムダ川以北クダー州か、プルリス州になる。プルリス州はマラヤ最北端でタイ領にはさまれてもおり、元々はクダー州から別れた州でもあるので、結局マラヤ農村調査地をクダー州の米作の単作地帯ときめたのである。

私達二人はまず農林省から state agricultural officer への紹介によって agricultural office の世話になって Alor Star を中心に村さがしをはじめた。いくつかの村を見て廻ったが帯に短し、褌に長しである。しかしいつまでも迷ってもいられないので人口、戸数等の関係で Alor Janggus ときめたのである。殆どすべての人がマライ人であるが、Alor Janggus 自身は country town で70戸程の中国人の商店のあるのも面白いと思った。マラヤの民族問題の中でマラ

イ人、中国人関係は最も深刻であるが、実際農村部ではどういう関係にあるのかということもある程度調べられると思ったからである。

アロル・ジャングスは日本で昭和16年に発行された「英領マライ・北ボルネオ地名辞典」にも出ており、アロル・ジャングス川とジャウィ川の西岸にあるとあるからそれ程新しい村でもないと思われた。マライの人口は20世紀になってから急激に増えているから分蜂的な新村が多く、あまり新しい村でも困るが、その点でもまづ好ましかった訳である。それにインド人が4戸あり、同じマライ人の中でも Indonesian とははっきり識別されている家も4戸程あってマライ人口の縮図も見られるようである。

お隣には Kampong Padang Lalang という1戸の中国人を除き全村マライ人農家という手頃な村もある。まづこの二つをやればという気持ちであり、多大な権勢を持つムキム (mukim) のプングルー (村長) に学校前に借家もきめて貰った。Alor Star から9哩、幸いにバスは数年前から通っている。

このマライの穀倉地帯にはどこへ行っても井戸はない。井戸と称するのはマンディをするところで、飲水は雨水か、時々村長の要請によって水道局が水を供給するのである。このことは予め判っていたが、吉田氏と二人でレスト・ハウスに帰ってから「いやまてよ」一体便所はどこにあったのだろうと言うことになった。翌日もう一度調べに行くと、便所へ50m 細い田圃のあぜ道を行くと一応のものがある。他の家のを調べて見るとひどいものばかりである。然しこの水と、この便所とではとても住めそうにない。家はオフィスに比べて、アロルスターのホテルから通えばよからうということになった。

これで一応調査地を決定して私達は K.L. に帰り、6月28日シンガポールに行く吉田氏を K. L. の Airport に見送って後続部隊の到着をまったのである。

(4) 私達のフィールド・キャンプ

口羽益生及び坪内良博両君の到着をまつ間、私は官庁出版物、統計類蒐集などに費した。両君が CX 故障の為にシンガポール廻りで K. L. に着いたのは7月10日。再び挨拶廻りをすませて、Alor Star にやって来たのは7月15日である。レスト・ハウスには長らく滞在ができないので Tai Aah Hotel を一応の常宿ときめた。前回逸した Education officer と Dist-

riect officer に挨拶まわり。District officer に会って話をしている時に一つの発見をした。マライシアは連邦であるから、連邦を構成をする州ないし Negara が、かなりの力を持っていることである。Kedah 州は sultan を頂く王国なのである。私達はそこで Kedah の State Secretary, Dato Shuaib bin Osman 氏にアポイントメントを取った。役所に出頭して見ると Kedah State の Mentri Besar (総理大臣) Dato' Syed Omar Shahabudin Al-Haj 氏が会いたいと言っているからと言うので大臣室に通された。見るからに素晴らしい紳士である。Alor Janggus 調査の許可と了解を求めると、もとより心よく引受けてくれた上、その地方の水のよくないこと、蚊が多くて住めるかどうかなど心配してくれる。Mentri Besar のお子さんが今日本へテレビの修業に行っていること、弟さんが駐日大使であることなど四方山の話が出て、案外なところに日本のファンがあることを知って心強かった。

ホテルから現地のフィールド・キャンプを見に行ったら両君は「ここに住んで見ましょう」という申出でをしてくれた。水と便所は大丈夫かと念をおすと大丈夫でしようという。私と吉田君はこちらから住み込むとは言わぬことに申し合せていたのであるが、若い諸君が申出でくれたのだから強制にはならない。「やって見よう」ということになった。一家をかまえるのだから設営は却々大変である。寝台、マット、シーツ、枕、蚊帳、テーブル、椅子、扇風器、大きな魔法瓶数個、水甕、薬灌、鍋、フライパン、食器、コーヒー茶碗、お盆、箸、スプーン、包丁、石油コンロ、消火器、たらい、洗面器、電球、スタンド、自転車、数えあげれば際がない。あらゆるものを買い込んで乗込むことになったのである。

マライ人風の高床家屋で6畳位の部屋が四つ、但しははっきりした仕切はない。それにたたきになった炊事場と水浴兼洗濯場がついている。家は比較的新しいが安建築で、床にはすき間があり、蚊の侵入をふせぐには寝台の下にティカルという簾をしかねばならない。風雨が強いとゆれるし、人がどしどし歩いてゆれる。屋根は普通のアタップ (ニッパ椰子) 葺でなくハイカラにトタンが使っている為に却って暑い。扇風器はあっても昼間は電気が来ない。それでもまだよい方である。アロル・ジャングスのマライ人の家で電灯の

ある家は半分しかない。パダン・ラランでは一軒も電灯をつけていない。

Saad bin Bakar と Rokiah binti Hj Hamid という60才と45才になる夫妻が通いで来て世話をしてくれる。Saad は学校の天水溜から水を汲んだり、買物をしたり、お給仕をしたりしてくれるし、Rokiah は洗濯と料理である。きれいずきでよく洗濯してくれるし、料理も比較的好い。しかし残念ながら料理の種類はそれ程多くはない。来る日も来る日もあまり変化はない。魚のやいたの、油いため、なっぽと卵をにたもの、魚をカレーで煮たもの。魚の代りに牛肉のこともあり、蝦のこともある。それだけである。きゅうりと玉葱をきざみ、唐辛子を加えて酢にしたものは一寸さっぱりしたよい味であるがスープに類したものは一度も出ない。無理もない。マライ人はスプーンを使わずに右手の三本の指で食べるからである。果物もバナナかパイナップル位で田舎では珍らしい果物は容易に手に入らない。

私達はプングルー、学校の校長、トアン・ハジと呼ばれる有力者にまづ接近し、漸次村人に交わり、一応はアロル・ジャングスの全戸を訪問して聞取を行った。収入など聞難いと思った点は案外簡単で、他人の月給までも知っているが、聞にくい問題もある。殊に男女の区別がかなりきつくて奥さんが居ても主人が居なければまづ聞取は不可能と言ってよい。

7月28日から約20日間マライ大学留学中の前田成文君が調査の手つだいに来てくれた。前田君は自ら Abdul Narif 等と称し、サロンを穿きアジャストが早い。それに若くて元気がよい。大いに助かった。

村の人も子供もよく遊びに来る。村の女は Rokiah の処へ遊びに来て、台所からひそかに観察して行く。結婚式に招待してくれる人もあるし、モハメット降誕祭やクツア・カンボン (ketua kampung) (カンボン-自然村の長) の会食にも招いて貰った。今までのところ村人との関係はうまく行っている。中国人にも何人が友達ができて粽子など持って来てくれたりしている。

調査もぼつぼつ進んでアロル・ジャングスについては略一通りの聞とりができ、9月はじめから隣りの純農村パダン・ラランの戸口調査をはじめているが丁度田植で農繁期にかかってしまった。気永にやるより外はない。

(5) 風呂へ入りにペナンまで

クダー州はイスラムが比較的強く金曜が休みになる。自分の日曜の気持と金曜休みがはじめは却々しっくり行かない。調査では人を捕えるのが大切で、休日などと言っておられない。一週に一日は休日にしようと言っていたが、はじめはうまく行かなくて殆ど休日なしに働いた。けれどもここでは休日より矢張り水が問題である。7月、8月の雨のあまり降らぬ間は飲水をアロル・スターまで買いに行ったりした。どぶ川の水はきたなくてとてもマンディはできない。ここまで訪問してくれたアジア経済研究所の萩原宜之氏はアロル・ジャングス川の水でマンディをしたら Dato の称号を与えると行ってくれたが、まだ Dato の称号を貰える人はない。汲んで貰った水でマンディをするだけである。大体このあたりのマライ人には風呂などと言う観念はない。川水やマンディ場でのマンディにもきまった仕来りがあって、暑いから何度でもマンディと云うのでもない。便所の下は水で、便所の中に魚が泳いでいる。イスラムは人糞をハラム (haram) として肥料にも使わぬが、水が出たり魚が食べたりで、何時とはなく解消して行く。

8月の半ばまでは暑かったけれども土地も乾燥し、便所通いの道もそれ程苦にはならなかった。しかし8月末から急に雨が多くなった。このあたりはマラヤも北部でモンスーンの影響を受け、海から3哩程のこの村には時々烈しい豪雨が襲う。村人待望の雨だし、今年は ular besar (たつ) 年で豊年だという期待の雨だから祝福すべきであるが、如何せん家は水の中に浮き、便所へは膝までの水に浸って行かねばならない。K.L. でピカピカだった靴もここ暫くは全くはけない。部屋の隅でカビが生えている。

豪雨のマンディとしゃれ込んで見ても冷水ではいくら石鹸をつけても身体のアカは十分には落ちない。結局ペナンまで泊りがけで風呂に入りに行こうかという相談が持上る。タクシーで片道1時間半の豪華な入浴である。この前1ヶ月程働いたところで一度ペナンへ風呂へ入りに行ったが、又そろそろ身体がねばっている。ぼつぼつペナン行を計画せねばならない。

いろいろ苦勞なことだけれども、村に住み込んで見てそれ丈の収穫はあったような気がしている。しかし私はこんな苦勞を隊員に強いる気持はない。生活困難な事態になれば何時でもアロル・スターまで引揚げて

くださいと言ひ残して日本に帰るつもりである。アロル・スターまでの引揚ですめばよいがというのが私の今の気持である。というのはインドネシア軍のポンチェン・クチールへの上陸とラバイへの降下で、ここ数日来とみにインドネシアのコンフロンティションが緊迫

の度を加え、この村にも自衛団が組織されたりしているし、9月7日にはヤン・デ・プルツアン・アゴン(king)はマライシア全土に緊急令を發布したからである。雨雲ばかりでなく戦雲まで動きは始めている。(1964.9.10アロル・ジャングスにて)

タイ国北部のカレン族調査ノート

飯 島 茂

仕事の都合で2カ月余り蒸し暑い Bangkok に釘付けになっていたわたくしにとっては、空から眺める Chiangmai 盆地の景色がなんと美しかったことか。飛行機のタラップから降りると、目の前にある Doi Sutep の山肌の緑が目にも痛い。それに吹いて来る風の甘さも格別である。やっぱり Chiangmai を調査の基地に選んでよかったとわたくしは思う。

こう書いてくると、すべてがいかにも快調のようだが、心の底にはなにか重くのしかかるものがある。それと言うのもわたくしがタイ国の研究についてはあまり自信がなかったからである。今年の2月末にセンターからタイ国に出張を命ぜられるまでは、仲間の矢野さんたちとともに、すっかりビルマ熱に侵されていて「今ビルマに行けば、1964年のビルマはわれらのものになる…」などとうわごとのようなことをたがいに言いながら、いそいそとビルマ関係の文献をあさっていたのである。しかし、残念なことにはビルマの政治情勢は日まじに複雑化して、今春になってついに外国研究者の長期滞在は事実上不可能であるという見通しになる。

このようにして、東南アジア研究センターのコー・プロジェクトの一つであるビルマ班はタイ村落調査班に再編成され、本岡武助教授をリーダーとして、水野浩一、矢野暢両氏にわたくしが加って、1964年4月から1965年4月にかけてタイ国で調査に従事することになった。

わたくしはタイ国研究の素人なので、バンコックに着くなり、あわててこの国の勉強を始めた。チュラロンコンやタマサートの大学図書館や Siam Society

の図書館に通ってみる。しかし、幸か不幸かこの国の山地民の研究ははなはだ少いようである。わたくしの心の中でハイド氏の方は「やれやれ、これで文献調査の方が少し助った…」と言う。一方ジギル氏の方は「これはえらいことになった、どうやって仕事にとりかかろう…」と途方にくれる。このような複雑な気持ちをかえながらわたくしは Bangkok から Chiangmai に移ったのである。

いずれにせよ調査の準備に入らねばならないのだが、もっとも新しい Gordon Young の “Hill Tribes in Northern Thailand” にしても総括的すぎてそれだけでは調査地の見当をつけることすら無理である。それに北部タイの人のように山地民に囲まれて暮している人々でも平地の人ほとんど山のことを知らない。とにかく自分で現地を歩いて見なければ何も解らないと言う至極当然のことが再確認できた訳である。わたくしは Chiangmai を中心に Doi-Chiangdao, Doi-Musur, Hod, Mae Sarieng など、南北に約600キロ、東西に約100キロにわたりルコネッサンスを重ねる。その間わたくしはいくつかの条件を考慮に入れながら調査対象に選ぶ山地民をだんだんとしぼっていった。その結果 Karen 族を調査することに決定したのは、だいたい、つぎのような考えにもとづいたからである。

1) タイ国北部には大把みに言って、二系統の山地民が住んでいる。その一つは Sino-Tibetan 系の山地民と、他は Austroasiatic 系の者である。わたくしは従来ヒマラヤ山中に住む Tibet 系住民の研究に従事してきた関係から、当然タイ国でも Sino-Tibetan